

研究分野：イギリス帝国経済史

現在の研究テーマ：

●20世紀前半（特に1930年代）におけるイギリス帝国と日本の経済関係

20世紀前半、とくに1930年代において、イギリス帝国と帝国域外国である日本との間にはいかなる経済関係が築かれていたのか、主にイギリス・インド・日本の綿貿易に注目して考察してきました。かつてインドは、イギリスの植民地支配の下にあり、綿製品などのイギリス製品の重要な輸出市場でした。しかし19世紀半ば以降、インドにおいても近代的な綿工業の発展がみられました。さらに20世紀に入り第一次世界大戦後には、日本綿製品の対インド輸出も増加し、イギリス製品やインド製品との競争が激しくなりました。しかしインドにとって日本は、インドの主要産品のひとつである綿花の主要な輸出先でもあったのです。1930年代に入ると、世界大恐慌を背景としてブロック経済の形成が進みました。そのなかで、イギリスとインド、日本の中で綿貿易摩擦を解決するための話し合いが行われました。ブロック経済形成の進展という背景の下で交渉を進めるなかで、3者の利害がどのように交錯し、どのように調整されたのか、そこには当時の人々のどのような考えが反映されていたのか非常に面白いところです。

●20世紀前半のインド・ボンベイ（現ムンバイ）における企業家の活動とネットワークの形成

19世紀から20世紀半ば過ぎにかけて、インドにおける企業活動では「経営代理制度」という制度が非常に重要な役割を果たしていました。なぜこのような制度が誕生したのか、この制度にはどのようなメリットあるいはデメリットがあったのか、という点についてはさまざまな議論がありますが、私は、この制度の下でみられた企業家の活動および企業家同士のつながりに興味を持っています。どのような人的ネットワークが形成されていたのか、そのネットワークにはどのような意義があったのか、ということ、近代綿工業が勃興した都市であるボンベイ（現ムンバイ）で活躍していた企業家を中心に考えています。

●インドにおける脱植民地化と経済成長

両大戦間期という時代は、それまで世界経済の中心にいたイギリスの力が相対的に弱まっていき、他方でアメリカが台頭してきた時代でもありました。1939年に第二次世界大戦が勃発した際、イギリスも参戦したのですが、独力では戦争を遂行できず、帝国の協力ならびにアメリカの協力が不可欠でした。インドが独立を果たすのは1947年ですが、私はインドの脱植民地化のプロセス—とくにその経済的側面—を、国際的な背景の下に位置づけて再考しています。